



理事会だより (2・10)

一、立春句会短冊吊しは、コロナ重点措置下ではあるが屋外であり実施したいとの主催の観光協会の意向を受け2月4日実施(13人、甘酒提供)。句会は会長決定により取りやめ。感染拡大の激増を踏まえた決定の経緯につき本理事会で会長より説明。

二、梅まつり俳句大会の一部につき事業部より結果報告、募集期間見直しの問題提起あり。

三、桜まつり俳句大会二部実施は観光協会決定に従うことで会長に一任。役割分担は3月理事会にて決定する。

四、定期総会に向け総会案内配布、会員(数)の動向確認。(総務部)

五、新会員募集チラシを梅まつり会員外投句者(約40名)へ作品集に同封送付(総務部、事業部)。

その他 第11回おおいゆめの里俳句大会は新型コロナ状況を踏まえ中止とおほる俳句会より。

「俳句おだわら」10句抄 (654号より)

岩楯恵津子 抄出

てのひらに身振ひするや新豆腐
バームクーヘンのやうな枯野が一枚
初冬の水音水を洗ひをり

夜を通し繕うははの影師走
余生とはつぎはぎだらけ日向ぼこ

大根の穴の数だけある戦禍

寂聴の天の座として寒鳥

遠吠えの絶対音感月青し

脳震盪起こした蟬が落ちている

枯野人燃えて宇宙に行つたきり

須田聡子 抄出

冬うらら城址と校舎隣り合ふ

てのひらに身振ひするや新豆腐

茶の花や蕊は茶筌となりて咲き

色変えぬ松や花押の座り良く

朝顔の實の部屋みつ種むつつ

ひとり居の月日は速し実南天

余生とはつぎはぎだらけ日向ぼこ

食パンの四隅に木枯ふいている

北向きの直哉の書斎小鳥来る

内緒事蔵するやうに聖夜の灯

内田知江子

寶子山京子

田中 幸子

中村 昌男

宮崎 悦女

木村 和彦

岡村 史郎

田畑ヒロ子

小島ノブヨシ

岡田 典代

関戸わよこ

内田知江子

廣田 悦子

庄司 下載

大木 敬子

高橋 正子

宮崎 悦女

小林永以子

出澤 洋子

村場 十五

第58回小田原梅まつり俳句大会

新型コロナウイルス下で第二部の俳句大会は中止となり、兼題「梅」「寒晴」の募集のみとなった。投句一六七名（うち会員八六名）二六九組五三八句。

神奈川県知事賞

寒晴の空へ逆転ホームラン

長島 久江

小田原市長賞

梅見客おりて電車が軽くなる

池田 忠山

小田原市観光協会会長賞

立つて聞くミニコンサート梅日和

片野 秋子

小田原箱根商工会議所会頭賞

窓拭いて寒晴の富士引き寄せる

清水 吞舟

神静民報社賞

寒晴や飛行機雲の走り書き

片山千江子

小田原俳句協会会長賞

寒晴やちりちり縮む干し野菜

田畑ヒロ子

小田原俳句協会賞

空っぽとなる寒晴の船溜り

長島 久江

白梅の兜太紅梅の寂聴

清水 吞舟

早梅や二人住いに杖二本

大澤 秀子

寒晴れや心音聞こえそうな空

中村 昌男

一湾の鋼びかりや寒日和

島 梅乃

選者特選賞評

寒晴の潔癖完璧片頭痛

伊藤 道郎

即座に井上ひさしの「樋口一葉頭痛完璧片頭痛」が思い泛んだ。と言うことは著名なフレーズを踏まえてのことであり、本歌取りであることは自明。剽窃ではない。井上作は記憶不確かだが、老化著しい今日此頃、身の奥処のあちこちが疼いてならない寒晴なのだ。

(佃 悦夫)

寒晴を舍利舍利と来る顔ふたつ

寶子山京子

寒晴が、あらゆるものを突き抜けていく。透化していく。あらゆるものが、仏陀の聖骨のように、存在しないものの象(しるし)として存在する。そして顔ふたつ。非在の澄明さがシャリシャリ。

(大石雄介)

青空へ梅のつぼみがかけるぼる

川上 靖子

人口に膾炙した(紅梅や枝々は空奪ひあひ)(鷹羽狩行)の「つぼみ編」と言った趣。ズームアップされた梅の枝がどこまでも空に伸び、びっしりとつけていた蕾を(かけのぼる)と擬人化したことで、詩に昇華された。蕾にも花にも、梅にはいつも元気を貰える。

(池田忠山)

狒犬の駈けだしそうな梅日和

息ひとつ吐くにも似たり梅開く

寒晴や沖より戻る大漁旗

梅白し遺影に漏らす独り言

寒晴や刃金のひびく石切場

梅園の羽毛のやうな日差しかな

寒晴の人の温みの残る椅子

紅梅や絵筆をすすぐ水の音

曲がる腰曲げぬ信念臥竜梅

選者特選賞

(小田原俳句協会名誉会長) 佃 悦夫特選

寒晴の潔癖完璧片頭痛

(小田原俳句協会顧問) 大石雄介特選

寒晴を舍利舍利と来る顔ふたつ

(小田原俳句協会会長) 池田忠山特選

青空へ梅のつぼみがかけのぼる

(おほゐ俳句会代表) 小野菊土特選

寒晴や逝きし人呼ぶ小盆栽

(小田原鹿火屋代表) 近藤久江特選

梅月夜万葉人の息づかひ

(こよろぎ代表) 神山つとむ特選

水音が水を離れて梅緩む

武村 桂子

大澤 秀子

関戸わよこ

内山 良子

小澤 純子

新井たか志

若村 京子

土屋 節子

日高 朝代

伊藤 道郎

寶子山京子

川上 靖子

井上 和子

杉本 久子

市川めぐみ

寒晴や逝きし人呼ぶ小盆栽

井上 和子

水をくれていただけでは盆栽にはならない。何人かの手が入り時間を経て今の姿となる。先達から受け継いだ盆樹の前に、此処まで育ててくれた人を偲び卓に飾る。盆栽は手入れの時を楽しみ、一時預かっている生きた芸術です。樹格が上がる事を願う次の人へ。

(小野菊土)

水音が水を離れて梅緩む

市川めぐみ

梅の木の下を小流れの堀があるのでしよう。さらさらと流れています。その流れが天気も良く軽やかに流れています。その水音を水を離れてと詩的な表現をされています。そのような暖かさで梅の蕾も緩んできます。感性が爽やかです。

(神山つとむ)

梅月夜万葉人の息づかひ

杉本 久子

元号が「平成」から、「令和」に変わり、この元号が、日本文学の万葉集の中から名付けられたことは、我々日本人にとって大変うれしいことです。

万葉集の梅花の歌三十二首序文より「令和」が元号として選ばれた喜びと、万葉人の息遣いを感じとった作者の感性に拍手を送りたい。私もこの序文を掛軸に仕立て、眺めている。梅月夜の季語がすばらしい。

(近藤久江)

「新作8句」鑑賞（二月号より各一句を鑑賞）

炎帝と嘯みあいながら寢屋に入る 佃 悦夫

今日は炎帝との戦いだ。俳句と向き合う自分と向き合う至福の時間なのだ。パワフルで手ごわい言葉に集中してヴォルテージを高める。ついに「嘯みあいながら」という言葉を勝ち取った歓びにあふれている。

寢屋というなまめかしい場所^{リビング}に炎帝さまを引き込んで、さて第二ラウンドはエロスの世界なのだろうか。謎の闇をさまよいながら夜は更けてゆく。俳句の魔性と出会ってしまった幸せな時間たちにまた春が来る。

（大石和子）

白息もつなく駅伝中継所

池田 忠山

千里を往くという寅のとし。二〇二二年の幕明け。第98回箱根駅伝。ランナーは王座をめざし、天下の險箱根へとひた走る。中継所は、小田原かまぼこの老舗前と推測する。厳しい練習、試練を超え、自分を律し釋をつないでひたすら走る。ゝたのむぞゝ 行け、行けゝ 声が飛び交う。凍てつく空気を切り裂き、急勾配の山登りがはじまる。「白息もつなく」以外は語らず見事な省略で、中継所を生き生き描いた佳句。（田中幸子）

初富士や大事にしたる深呼吸

新井たか志

新井氏の新年詠、佳句八句が揃ったが、掲句が作者

の気持ちが一番良く現れているように思った。毎日の呼吸が自分を支えていることにふと気付く時がある。ちなみに自律神経を正常に保つためには、せかせか話すことはタブーだそう。ゆっくり息を吐き、大きく深く息を吸う。体中の一つ一つの細胞にまで空気がゆきわたるように。青い空に冠雪の富士がまぶしい。

（齊藤 桂）

点眼の鳩にでもなつてみるか

大石 雄介

点眼のあとの一瞬の明るくぼやけた世界のなかで、「鳩にでもなつてみるか」と呟いてみた。「鳩になる」ではない。この「でも」が肝心なことなのである。注意深く生きていくことにも飽きた。毎日の暮らしは煩わしいことばかりである。不快なことなどご免こうむりたいものだ。目が衰え余計なものを見なくて済むことは天の恵みなのである。すこし投げ遣りのような、この表現は「老」と暮らしていくための極意を語っているのかも知れない。

（瀬戸正洋）

稲ほつち最終電車過ぎし闇

足立 和子

まだ水田が多く残るこの辺り。収穫の済んだ田圃には、稲藁の束があちこちに点在する。長閑な風景ではあるが、一面の黄金の稲が消えて切株と藁束だけが残る侘しい風景でもある。そして最終電車が過ぎれば辺りは真の闇。時は過ぎ、辺りはやがて晩秋の景となる。

稲ぼつちを擬人化し閑寂な風景を良く表している佳句
と思う。
(加藤かほる)

歪む月砲声が地球のどこかで
小澤 園子

月。日本の四季の美を代表する大きな季語の一つ。
なんとその月が歪むとは衝撃的だ。

砲声。遠くの国で近くの国で、銃声や砲声が鳴り響く。不安、悲しみ、恐れ。苦々しくやり切れない。

私に何が出来るか。やり過ぎすか、祈るか、請うか。
そのどこかを検索し、世界地図を開き確かめてみた。
ため息が出るのみだった。
(菅野英余)

湯豆腐や妻と二人の風聞く夜
神山つとむ

夫婦二人の夜、湯豆腐の静かに揺らぐ部屋で更けゆく夜の風音を聞いている。

結婚し、子育て子離れと幾段階の中で喜びも悲しみも様々を共にしてきた夫婦の到達した今なのだろう。
作者の妻への思いが中七の「妻と二人の」の「の」に表れている。何もかも共にしてきた妻は何ものにも替え難いと、しみじみした感慨の味わい深い句だ。

朝光の一舟の水脈鴨のみを
(陌間みどり)
高橋久美子

静謐で研ぎ澄まされた叙景句である。湖であろうか、手漕ぎで漁に出る小舟と並走するように進む鴨。上りかけた朝日が低い角度で照らす湖面に、二本の水脈が

光る。中七と下五の美しいリフレインがこの句の要である。水脈とみをの使い分けも含めて、控えめな表現に作者の技量が籠められている。写し取られた風景は詠者の清楚な句境の表出であろう。

(庄司 下載)

新作5句

神野美代子

菜の花や老いのすさびに五七五
季語がない助詞もをかしや山笑ふ
句作りは言の葉ゲームうららけし
おそ桜話し相手を募集中
春眠を覚めて八十路の脳細胞

杉本 久子

水底に身を寄せ合ひて寒の鯉
丹頂の天に一声鶴の舞
雪解水至仏山より尾瀬ヶ原
梅かをる待合室に盲導犬
産院に産声あがる木の芽晴

田下 昌人

寒風や朝月あぐる芙蓉峰
冬燭やびんづるさんの影かたち
彫大な夢のごとくに春の富士
入相を文字づるごとく春の雪
陽炎や路面電車の里帰り

俳句おだわら(2・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(1・21)

久江報

初御空夢のふくらむちぎれ雲

足立 和子

右府の和歌めぐらす塚の寒雀

川本 育子

福寿草平穩の日々卒寿かな

高橋 小糸

函嶺と丹沢つなぐ初茜

山崎 悦子

初めての個展はづむや梅三分

近藤 久江

◆沈丁(2・5)

寶子山報

啓蟄や庭で狸と鉢合せ

中野 文子

啓蟄や片言の嬰は宇宙人

若村 京子

梅日和一会の人と別れけり

柳澤ミサ子

啓蟄やポリプ切除りし腸蠹く

田中 恵一

啓蟄やおてんと様と握手する

河本 純子

啓蟄や深海魚ちとざわついた

瀧本 敦子

啓蟄の赤子手足で空をける

勝木 澄子

啓蟄や北より帰る子を待てり

菅野 英余

啓蟄や友より果報葉書にて

高井 幸子

啓蟄や陽につぶやきぬ土器の片

片野 節子

啓蟄やまだまだ在たいぬくぬくと

峯尾ユキエ

啓蟄やほほをなでゆく風やさし

河本チヨ子

上りばかり混む啓蟄の新幹線

寶子山京子

◆春野(1・16)

きよ志報

高みより鴉の鳴くも淑気かな

秋山 昇

使はれることなき魚網冬日和

伊藤はる子

初雪の積もるまでゐる金閣寺

内田知江子

年寄の頑固一徹山眠る

尾崎 一夫

天心に挑むかに鷹ゆきにける

瀬戸 悠

寒月に笑ひゐるやう捨て人形

二見 和江

日時計の狂ひ始めし冬日和

長谷川きよ志

◆みなみ(1・29)

かほる報

日々愛しぬくき山河や布団干す

加藤 富江

丸まつてバス待つ園児寒雀

豊田 幸枝

明日は明日今日の陽射しに布団干す

市川めぐみ

ほこほこの布団に母の寢息かな

斎藤 静

初場所や和服姿の砂かぶり

加藤 健治

寒椿観音堂は女坂

飯田 愛

孫可愛い年玉の礼言わぬとも

加藤れい子

手に取れば温もり嬉し寒卵

小瀬村信子

寒椿見上げる空に矢倉岳

村上 龍山

胎内へ帰巢本能干蒲団

加藤かほる

◆青梅(2・9)

幸子報

梅が香や御殿場線の増発す

大塚 行人

白髪やほつほつ生きて梅一輪

湯本とし子

アルバムの断捨離ならず春一日ひとひ

神野美代子

花曇り鏡の中の歪む顔

加藤まり子

一粒の薬ころがる冬厨

久保寺トミ子

春浅し若き鳶職きびきびと

田渕 令子

衿元にパステルカラー春隣

田中 幸子

◆香雨・梅ごち(1・16)

忠山報

絵馬掛けの願ひそれぞれ春を待つ

肥後ちさこ

傾きを正し客待つ注連飾

関戸わよこ

手にとりて読むや句のある年賀状

青山 典子

満天の星がす如どんどの火

門松 鳳文

大鳥居くぐりおのづと淑氣満つ

吉田 百代

大初日朱を分けあひて空と海

吉田 康雄

恙なき顔火照らせてどんど焼

陌間みどり

ひび割れも大き老舗の鏡餅

小澤 純子

一枚は富士の高みへ吉書揚

池田 忠山

◆こよろぎ(2・10)

つとむ報

芹の香の胡麻味噌で和へ銘酒酌む

板谷 雅泉

無住寺となりて久しや沈丁花

植松テル子

木と木と木冬深まりぬ足柄路

神山つとむ

◆たけのこ(2・9)

悦女報

伏す夫の鏡開きだおしるこだ

三木 泰子

孫の来てピーナツとなる節分会

徳田 公子

人動く気配に翔てり目白二羽

小宮 早苗

啓蟄や止む事知らぬオミクロン

久津間百合子

病む夫に双児揃ふて寒見舞

宮崎 悦女

◆鷹(2・16)

十五報

餅花や商店街の集会場

青木 孝子

読初や寂聴源氏口語訳

西賀 久實

雪嶺や上りし月の緊まりたる

佐宗 欣二

淑氣満つ日比谷のビルの日章旗

須田 晴美

玉子割る炊立て御飯はや五日

中田 笑子

太箸や厄年とうになき夫婦

百川 秀子

白菜の葉にかをりなし空真青

山崎美知子

梅が香や次々中る弓の音

庄司 下載

満点に大きはなまる三月来

瀬戸 りん

室咲や換気のドアに支かふ楔

高橋久美子

蛤は砂吐く吾は鼻唄す

中山智津子

淡き日の寛にたゆたに浮寝鳥

齊藤 桂

天心に朝月椿蒸しにけり

芹澤 常子

日脚伸ぶ縦に割れたるうなぎパイ

畠 梅乃

山住みの夜の静寂や木の実降る

弾初の晴着と帯に風入れる

受話器より自動音声春寒し

その昔木賃宿なり梅の茶屋

薪爆ぜる音やカウチの指定席

焼芋の釣りは駄賃となりにつけり

冴ゆる夜やエリアメールの誤配信

句読点見直す稿や一葉忌

澄みわたる仏鈴の音や寒の入

胡弓きく音楽堂の春日かな

太鼓打つ男の汗や松の内

人住まぬ家に紅梅目立ちけり

酸欠の重たきからだ猫の恋

夕東風や宅配の人走る走る

仏壇にバレンタインのチョコと花

命日の母へきんつば桜東風

三月や公民館の男下駄

梅東風やバス停前の漬物屋

観梅や枯山水を雀発つ

昔ながらの床屋老練春の雪

山口安規子

大木 敬子

大島美恵子

北崎 修

田下 昌人

中根 和子

加藤 幾代

高橋 正子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

下平 美子

杉崎 せつ

関根 琉子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

史郎報

人の世の流れに棹さす花筏

茶の花の白き心地や佳き話

ふるさとの畠のすみにお茶の花

ベトナムの実習生等の雪だるま

一六のはじめての帯春の雪

手編み帽ほづれ繕い春立ちぬ

野外授業シメのクイズはお茶の花

◆実のり(2・17)

雪搔きの厳しとありし友の文

雪の庭俄か作りの餌の台

瀬朝の旗揚げの地やアロエ咲く

恵方道眩しきものに鳥その他

◆おほる(2・9)

料峭や格差広がる世に棲んで

前髪を光の春が触れていく

採寸や未知の伸び代草青む

雨だれの調べかろやか春兆す

日溜りや恋に疲れし春の猫

浜に寄る波が癒すや春の海

白梅の咲き初める日を心待ち

雪蹴立て青天に舞う若者よ

青木たけを

伊藤 道郎

井上 良子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木 一路

岡本 史郎

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

昌男報

横塚 昌平

石井きよ子

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

風間 秀泰

加藤 春江

坂入清四郎

◆零(2・17)

今日少し心やすらか母子草

瀬戸とみ子

お懐紙の透かし浮きたつ利休の忌

小林永以子

寡黙なる山河の息吹春めけり

高橋みどり

餅を焼く遠き記憶の大家族

一ノ瀬茂代

北風が身を切るような外仕事

中津川晴江

雪の夜の翻車魚のような枕

大石 雄介

和三盆口にほどけて寒の明

中根登美子

春だ春猫の本性躍り出る

大石 和子

春立つや少年多感な手を洗う

中村 昌男

鶯の二声残る庭いとし

鈴木久美子

白き毬つなぐ手のある花八手

廣田 悦子

迷い猫尋ねるチラシ去年今年

出澤 洋子

大根煮る匂いほっこり家中に

二上 光子

起き抜けのいつもの背伸び去年今年

木村美千代

ふるさとの違う夫婦や雑煮餅

和田恵美子

寒明けて八十路ばかりの兄妹

岩楯恵津子

元気でと両手振る子や冬薔薇

尾崎 幸子

出発進行一月のカレンダー一駅を出づ

北村 文江

寒鯉の眠るか池の面平ら

中山 妙子

先生の赤えんぴつやヒヤシンス

須田 聡子

校庭は昼休みらし寒明ける

尾崎 竹詩

鞭受けて春に駆け込む一馬身

田畑ヒロ子

正面をずらす寄せ植え春隣

石田加津子

風花や刻を跨ぐ恋君がいる

穂坂志げる

面長の夢二の挿し絵梅月夜

竹下由里子

出来ること数へる余生梅真白

山田 照子

風光る藤井聡太の選ぶ菓子

重満報

百姓は名刺いらすやす春耕す

山口 千代

春の山まだある九十の底力

石井 秀稀

反抗期来たかきたかと冬木の芽

岡田 典代

はらわたに冬三日月が嚙み付いた

井上 和子

磯の水はしゃぎはじめて二月尽

小澤 園子

種選びアルキメデスに頼もうか

佃 悦夫

寒昂ゴジラメガムリオン地形区に

小島ノブヨシ

◆無所屬

佐々木重満

恋猫の虹彩闇をすり抜ける

杉山あけみ

冬暖か土竜ちよろりと顔を出し

すかんぽや自律神経失調症

瀬戸 正洋

青木 勝子

加藤 幾代

手櫛に結ふ起き抜けの髪花見鳥
休田の犬と戯れ合ふ仏の座
麻酔醒め吾呼ぶこゑやのどけき日
昼餉には磯のかをるや石葺蕎麦
春光のサフアリーパークとらごろ寝

関戸わよこ

婚の荷の窓辺に積まれ花苺
いないいないばあの目と目や桃の花
のどかさや生食パンの店に列
夜の闇切りさくやうに猫の恋
天と地をひつくり返し春一番

肥後ちさこ

薄紙を取れば目覚めて箱の雛
梅の枝の百の蕾にある明日
太陽の落し物めく鼓草
ふらここを漕いで笑顔をとりもどす
チューリップ伸びつつ色を明かしつつ

柳澤ミサ子

紅梅咲きなじむ巾着古代裂
天神社芭蕉の句碑とふらここと
一握の土を褥にももの芽吹く
卒園児のさへづり止まぬ学橋
健診終え街は人ひと日脚伸ぶ

新会員を募集しています

お知り合いをお誘いください。

〈小田原俳句協会のご案内〉

俳句を通じて社会文化の向上に資すると共に、会員相互の親睦をはかることを目的としています。

1、小田原俳句協会報を毎月発行し「俳句おだわら」欄にひとり一句が掲載されます。昭和四十一年に創刊され一回の欠損もなく本号で六五六号です。

2、合同句集を五年毎に発行し、ひとり二十句掲載（令和元年に第十二集）

3、俳句大会、吟行会の実施

○小田原梅まつり・桜まつり俳句大会等

○立春句会（小田原城址公園の梅に短冊吊し）

○秋の吟行会

○小田原城天守閣前、市立病院ギャラリーへの

会員俳句短冊の掲示

○各地区俳句大会への協賛参加

4、年会費 三千円（郵送の場合は別途郵送料）

入会の問い合わせ

○最寄りのグループ代表者等当協会会員

○総務部長（佐々木）○八〇一―二四七―八八七八

理事会日程 3/10 4/14 5/12

第69回定期総会 4/21 いずれも木曜日午後六時から